

梁高僧伝における神異について

田 中 敬 信

宗教は多様な相を示して、人々に接する事は、十分に知られているが、その中でも奇跡は、世界のどの宗教に於いても、人々を宗教に引き入れる大きな力となっている。特に新しい民族、文化圏に宗教が入つて行く時は、この種の奇跡は、その宗教の力を示すものと考えられる。

仏教に於いても、この事は例外ではない。仏陀の時代から奇瑞は表われ、奇跡は示されて、それが人々の仏教への帰依の姿となつて来た。中国に仏教が流入された前後の様子もこの奇跡が大きな力となつたと想像出来るし、仏教の中国化というものにも、この力が大きな影響を及ぼしたと考えられる。

今ここに中国初期仏教史の一資料として、梁高僧伝を取り上げ、この中で奇跡——梁高僧伝では「神異」としている——がどの様に示され、考えられているかを考察してみよう。ただしこの神異が全て容認されうるものではなく、あくまでも素材としての扱いである。

表によれば、高僧二百五十七名中、神異事項が読み取れる

人数は、百四十一名となり高僧全体の過半数を越える。これ等を禅関係に就いて考えると、神異者の六割を越える者がこれに当るが、各科に於ける分布は多様である。又遷化するに当つて、その予告や、その前後に於ける神異があつた者は、神異者の四割弱となる。これ等二つの事項から、神異というものゝを総括させて、何か一つの事柄で説明するのは無理な事で、個々別々に考えるものである事を示していると思う。それでは、各科別の傾向はどうであろうか。

訳経、訳経者の半教は神異者と考えられる事柄が読み取れたが、さらに十八名中十四名は外来僧であり、残りの四名も中国僧であるが流沙を渡り求法の旅をしているもので、中国以外の地での仏法に接し修行している事は重視すべき事柄である。この為にも禅に関係する者が十七名も出て来ていると言えよう。又遷化前後の割合の低さは、終る所を知らず、とか、外国に帰国して詳細不明によるものといえる。

義解 神異者の占める割合は低いが、禅との関連は他に比

計	唱導	経師	興福	誦経	亡身	明律	習禪	神異	義解	訳経	科	
											高僧①	神異者②
257名	10	11	14	21	11	13	21	20	101	35		
141名	3	5	13	15	9	3	17	20	38	18		
55%	30	45	93	72	82	23	81	100	38	51		
89名 63%	1	1	3	6	6	2	17	9	27	17		
52名 37%	1	0	2	3	6	1	12	8	15	4		

① 傍出付見者は入れない
 ② 各科の高僧中の神異者の割合を全て四捨五入で示す
 ③ 神異事項が読み取れた人数
 ④ 習禪者、禪経訳出者、念仏者等を全て含む、禪の一部として
 ⑤ 当時の念仏は考へる
 ⑥ 死の予告、死ぬ時及び死後に於いて神異が読み取れたもの

して高く、一名の帰化人僧以外は全て中国人と考えられ、遷化前後の現象も多くこれ等は単なる經典の内容学習の立場のみでなく、宗教者としての經典研究である事を示している。

神異 ここでは、多彩な神異を示すのは当然としても、禪関係でも、遷化等に関してもそれでこの科を整える事は出来ない。外来僧も四名おり、その出没の不明の者が半数近く居て、老荘思想との結びつきからか、仏教からも出離した様な話もあつて一番むずかしい科である。

習禪 高い割合で神異者が出ており、禪に関係あるのは当然と考えられるが、遷化前後の神異も一番多く読み取れ、鬼天人、神人等との結び付きが七名もあり、誦経に入っていないが、宝積経を誦しての神異もみられる。

明律 神異との関係では最低の科である。これは律の研究に関する方面が強く出ている為と考えられるが、又持律持戒は仏教者として一番大切な事であり、それが修道者として純一性を示す為、かえつて神異という泥臭い現象を示し得ないでいるのではないであらうか。

亡身 禪と遷化に関する割合は高い。神異事項を読み取れない二名も、薬王品を誦し、浄名像を拜するとしている。この亡身では、己が身を捨て他の人々を助け、それによつて仏道を行じようとする施身が四名、經典により、仏に己が身を焼身供養する五名があり、經典は、法華経薬王本事品がこの

うち三名あつて、当時の僧侶への法華經の影響の一つの表われとして注意すべきであらう。

誦經 經を誦する事が福であり、神異を伴うという考えは大乗經典によつて示されたものであるが、ここでは、法華十二、維摩四、十地三、涅槃三、般若、思益、般舟各々一、という誦經の經典が読み取れる。この事から、当時の經典の受持傾向が理解される一面がある。又これら經典とは別に、觀世音を誦しての神異は他の科にもまたがつて広く認められる傾向である。論では、四名の者を誦經の果としての神異者として列記している。

興福 神異の科以外では、ここでの神異者が最高の割合を示しているが、これはその論においても、十名の者を造仏、造塔等の福の果として、神異者にあげている。この為、禪、遷化等との関連は薄く、造仏、造塔等も阿育王との結びつきが示されている。これは、經典によつたり、伝としてこれらの事項が阿育王の時代より始まつた事を示すと共に、その神異も阿育王との結びつきを多く示しているのが見られる。

經師、唱導 この二科は、それぞれの伝統が新しく、高僧伝の編せられた時までに時間が経過していかない事もあつてか、内容的にも不十分で、神異事項もそれにともなつて少ない。この事は、高僧伝の成り立ちに原因があると考えられる。次にこれら神異者を、この高僧伝の資料のみで時代を求め

てみると(表は記載の余地なし)百四十一名中百八名の者が確かめ得る。誦經に属する者は古く、唱導の者はその論によつても懸遠以後とされる為、神異者も五世紀に入らなくては姿をみせない。しかし、この百八名の神異者分布からも四世紀初期、五胡十六国時代よりは、その数が多く示されている。これは、仏教の流布傾向が四世紀初頭から広がりを示して来たものと理解される。と共に、神異者としての仏図澄が重要な位置に來ている事がわかる。それと共に、この四世紀初頭から始まる中国北方での混乱は、一般に玉門関を通つて來る仏教が、北方だけのものでなく、南方への僧侶の移動と共に、漢民族以外への仏教との接触流布が、神異という現象によつて権力者に関心を持たれ、それが仏教の本当の理解でなく、治政、権力への資助としての立場であつてもその広がり をさらに助長した事は、見逃す事の出来ないものである。さらに一般民衆がこの混乱にあつて、古代からの中国固有の信仰と、異神の信仰である仏教との、神異面での接触から、仏教の影響を受けて行つたであろう事は十分に想像できると思う。しかし梁高僧伝は、時代的には五世紀中頃よりの資料が多い様であるが不十分であり、地域的にも北方より南方が詳細である事から、一つの限界が考えられると思う。

1 拙稿 印仏研一九卷一号一三八頁参照。

2 国訳一切經高僧伝解題参照。